

甲状腺外科草子 36

清々しい万葉の歌

杉野 圭三

万葉集でハイライトを浴びるのは、天智天皇、天武天皇、額田王を中心とする時代のものであろう。しかし、大化の改新、壬申の乱、大津の皇子事件、有馬の皇子事件など、この時代には権力を巡る不幸な出来事や複雑な男女関係などがあり、あまりにも多い。次の一首のみ取り上げる。

塾田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかな
ひぬ 今は漕ぎ出でな (八 額田王)

新羅遠征のため愛媛県松山付近で出陣する時の勇壮な歌である。白村江で大敗しなければ歴史的に大宣伝されたに違いない。

平城京遷都 (710 年) 前後からは歌聖と言われる山部赤人や柿本人麻呂、大伴家持、大伴旅人らの気持ちのよい歌が多い。



柿本人麻呂



山部赤人

田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける (三一八 山部赤人)

あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり (三二八 小野老)

娘子 (おとめ) らが 袖布留 (ふる) 山の 瑞垣 (みずがき) の 久しき時ゆ 思引き我は (五〇一 柿本人麻呂)

振り放 (さ) けて 三日月見れば 一目見し 人の眉引き 思ほゆるかも (九九四 大伴家持)

春の園 紅にほふ 桃の花 下照る道に 出で立つ娘子 (四一三九 大伴家持)

石走 (いわばし) る 垂水 (たるみ) の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも (一四一八 志貴皇子)

天 (あめ) の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ (一〇六八 人麻呂歌集)

ひさかたの 月夜 (つくよ) を清み 梅の花 心開けて わが思 (も) へる君 (一六六一 紀 (きの) 少鹿 (をしかの) 女郎 (いらつめ))

どの歌も平和で穏やかな時代を反映した清々しい名歌である。

貧窮問答歌で有名な山上憶良は額田王と同じく大陸からの渡来系の人であるとの説があるが、歌は日本人以上に日本的なものである。

憶良らは 今は罷 (まか) らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ (三三七)

銀 (しろがね) も 金 (くがね) も 玉も 何せむに まされる宝 子にしかめやも (八〇三)

世間 (よのなか) を 厭 (う) しと恥 (やき) しと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば (八九三)

憶良の最後の歌は天平五年 (733 年) とされる。

士 (をのこ) やも 空しくあるべき 万代 (よろづよ) に 語り続くべき 名は立てずして (九七八)

「士は空しくあってはいけない、充足して生き、後世に語り継がれる名を立てるべき」という辞世のような名歌である。

その他にも万葉集では「黒髪」を主題とした名歌が多数あるが、以前に「甲状腺外科草子 18: 黒髪の魔力」で紹介したので割愛する。

肖像は菱川師宣画 (国立国会図書館蔵) を中心に掲載。

参考文献

中西進. 万葉の秀歌. ちくま学芸文庫

万葉集. ビギナーズクラシックス. 角川ソフィア文庫、

中西進. 古代史で楽しむ万葉集. 角川ソフィア文庫

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022 年 7 月 21 日